サービスラーニングの活動を通して感じたこと考えたこと

社会福祉学部社会福祉学科２年　寺田　圭佑
活動場所：NPO 法人　共育ネットはんだ
クラス：野尻　紀恵　先生

自分は共育ネットはんだにサービスラーニングに行ってきた。自分の中で成長や気づくことはたくさんあった。

自分たちは初日、職員さんの話し合いに参加させていただいた。会議という形だったので、緊張した空気を想像していたが、職員さんたちはとても優しく和やかであたたかく、笑顔が多い空間が作られていた。そこから、子どもたちのことを一生懸命に考え、思っているのが伝わってきた。職員さんたちの子どもに対する思いが会議にも、にじみ出ていると感じた。実際、子どもたちの成長した話をするときは、職員さんみんなが、とても笑顔が多く、子どもたちのことを思っていると感じた。子どもたちの成長を心から喜べる、そんな心が改めて大切なのだと感じた。

二日目に親御さんたちの話し合いに参加させていただいた。自分は親御さんの気持ちに興味があり、知りたいと思っていた。自分の立場に置き換えたとき、自分の子どもに障害があったら、自分はどのようにかかわっていくのだろう、と考えたことがある。その時考えたことは、自分の子どもと向き合っていけるのか、ちゃんと愛せるのか、はっきりと結論を出すことができずにいた。だが、親御さんたちのお話を聞いて、自分の中の考えが変わっていった。親御さんたちはしっかりと障害を持つ自分の子どもと向き合い、愛情がある、とお話の中から読み取ることができた。子どものことを思い考えて、さまざまな NPO をまわっていらした方もいらっしゃった。親御さんの中には、最初どのように対応していいかわからない方もいた。障害に詳しくなければ、自分の子どもでも対応のしかたがわからないのはあたりまえだろう。そんなときに、地域の NPO などがとても強い力になってくれるはずだ。自分の子どもがもし障害をもっても、地域の力や共育ネットはんだのような NPO があれば、安心して任せられる、と考えた。そう思えるような NPO がもっと知られるようになっていけば、安心したり、子どもと向き合ったりできる人も増えると思った。

また活動面では、自分はあまり行動的ではなく、すぐ誰かに頼り、言われて行動するタイプの人間である。その性格がサービスラーニングの活動の中でも出てしまっていた。活動をするときに、ひとりがひとりの障害児の担当につく形だった。初めての経験でもあったのでとても不安な感情をもった。案の定、最初自分はただ子どもの横に立っているだけだった。職員さんに声掛けをしてあげてください、といわれてようやく声をかけることができる程度のことしかできなかった。声をかけても言うことを聞いてくれない、目もあわせてくれない、何をしていいのかもわからない状態であった。自分の力のなさ、知識の薄さ、そして思いついたことでも、自信がなくそれを行動に移せず、情けない自分がいた。

子どもたちと会った初日は、本当にただそこにいただけで何もできていない感じがし、何をしに来たのだろう、と思った。だが、次第に自分から積極的に話したり、行動したりすることができるようになっていった。

子どもと関わるときに、個性を見ることが重要だと気づいていった。活動の中で障害にもさまざまな個性があると感じることができた。例えば、知的障害とひとくくりに言っても、子どもひとり、ひとり違い、得意や苦手があり、好きなものや嫌いなものもはっきりしていた。その子の個性をみて、同じ目線で関わることが大切だと感じた。自分から考え行動することは、とても難しいことだと改めて思った。また、自分から行動することによって、見えない部分を、相手のほうから見せてくれる時があった。行動してコミュニケーションをとらなければ、相手のこともわからないままだと感じ、コミュニケーションの重要性を感じた。自分で気づき行動に移せたことで、自分の成長にもなった。

共育ネットはんだの活動理念に「子どもたちを共に育み、子どもたちと共に育ちあう」というものがある。実際に活動の中では、子どもたちの成長を見ることができた。たった三か月の月日でも、それを感じることができた。そして、自分にもたくさんの学びをいただいた。職員さんからは、子どもたちに楽しんでもらい、自分たちも楽しむ、という言葉をもらった。毎回その日の終わりの反省会で「今日は楽しかったか」と聞かれていた。その言葉に対して、自分は最初は合わせることしかできなかったが、後半はその日あったことを、楽しく説明することができるようになり、日々できることが増えたように思えた。自分たちも楽しく活動する、考えてみればとても当たり前で、自分が楽しくなければ、子どもたちも楽しんでくれるはずはない。自分もめいっぱい楽しむことで、相手にも楽しんでもらう。そのことに気づき、自分は活動にも慣れた後半ではできていった。

社会の中で障害者は生きにくい場が多い。そんな生きにくい社会をよりよく生活できるための支援が共育ネットはんだにはあった。活動内容の中に、障害児の自立のお手伝い、というのがあった。その活動で障害児はサポートを受けながらも、料理を作ったり、工作をしたりする。このような活動により、障害を持つ子どもたちが、社会に出やすくなったり、社会に出る準備をしたりしているのではないか。また、共育ネットはんだでは、農園もやっており、そこでできた野菜を、子どもたちが販売する活動もしていた。地域の人たちと関わりを持つこと、そして、販売という社会活動の練習の場があるように感じた。そうして、職員、利用者である子どもたち、地域の人々による空間ができている。この空間により共育ネットはんださんと、地域がつながっているのではないだろうか。

今回の活動を通してさまざまなことを学ぶことができた。現場に出ることによって、いろいろな人と関わることで、地域の輪が広がっていくのが感じた。最後には自分もその場に混じり、地域の輪の中に入ることができたと思う。